現代語における感情・評価の「ガ」

清水泰行（しみず　やすゆき）（関西学院大学非常勤講師）

１．はじめに

現代語において、ネガティブな評価的意味を持つ名詞句にガが後接した形式の発話は頻繁に観察される。本発表では、このガの意味・文法的特徴について、実例[1]に基づいて考察する。

(1) a.（一歩が気合の入った練習をしていると聞かされて）鷹村「ばっか野郎があっ‼」（一歩に近寄る）「てめえオレがロードワーク出たときから叩きっ放しか？／やめねえかコラァ‼」（一歩を体を張って止める）「やめろっていってんだろ‼」（鴨川会長が鷹村に抱えられたままの一歩の手からボクシンググローブを無理やり外す）一歩「あっ‥っ」鴨川会長（一歩の血まみれの手を見る）「このバカ者があ‥‥」（『はじめの一歩』73「失われた目標」）

b.（自分の任務について勘違いをしていることを指摘されて）善逸「そういう妄想をしてらっしゃるんでしょ」宇髄天元「クソガキが‼／これが鴉経由で届いた手紙だ‼」（『鬼滅の刃』71「遊郭潜入大作戦」）

c. 幽助「人間界ぶっつぶしたいんだろ／ならぶっこわせばいいじゃねェか／全力で暴れてみろよ」仙水「馬鹿者めが／それが傲慢だというのだ!!!」（『幽★遊★白書』144「止められない！！」）

d.（休暇任務が与えられたことを置き手紙で知って）クトー「あのバカが…／仕方がない」（『最強パーティの雑用係～おっさんは、無理やり休暇を取らされたようです～』1）

e.（ハンバーガーショップに転向した宇多の作ったハンバーガーを食べて）海原雄山「宇多の愚か者めが…／あれほど私が目をかけてやったのに…」（『美味しんぼ 9』1「ハンバーガーの要素：後編」）

ガは、通行の辞書では、ののしりの気持ちを表すというような説明がされている（２節で述べる）。確かに、ガの出現する(1)の下線部の発話にそのような気持ちを読み取ることはできる。一方、(1)は、多少のニュアンスの違いは出るものの、(2)のようなガが出現しない発話と置き換えることが可能であり、その場合でも、同様ののののしりの気持ちは認められる。このことから、ガが表すとされるののしりの気持ちは、ガ自体によるものではないように思われる。

(2)「ばっか野郎！／このバカ者！／クソガキ！／馬鹿者め！／あのバカ！／宇多の愚か者め！」

(2)のようなネガティブな評価的意味を持つ名詞で構成される文は、笹井(2019)において、その発話によって話し手の情意（怒り、呆れ、嘲り、蔑み、嫌悪、侮蔑など）を表出しつつ悪態をつく文、すなわち「悪態文」として位置付けられている（3.1節で述べる）。このような「悪態文」の機能と(1)におけるガの意味とを関連させて考察するということはこれまでに行われていない。本発表は、(1)におけるガの意味が何によっているのかを、発話によって表出される話し手の感情・評価と関連させて明らかにしようとする試みである。その際、話し手のネガティブな感情・評価を表す「悪態文」のみならず話し手のポジティブな感情・評価を表す(3)のような文にも着目して考察する（(3a)は笹井(2018)において「ほめあげ文」として位置付けられている文であるが、(3b)も含め3.2節で取り上げる）。そして、ガの出現環境を示し（４節）、ガの出現に一定の環境が成立する背景について説明する（５節）。

(3) a.「よっ／いよっ！幸せ者！」

b.「よっ／いよっ！この幸せ者！」／「ヒューヒュー！この幸せ者！」

２．辞書におけるガの記述とその問題

現行の辞書において、ガがどのように記述されているかを確認しておく。ここでは、ガの記載が見受けられた辞書として14種（『日本国語大辞典第２版』『岩波国語辞典第８版』『旺文社国語辞典第11版』『角川国語辞典』『学研現代新国語辞典改訂第５版』『言泉国語大辞典』『広辞苑第７版』『小学館日本語新辞典』『新潮国語辞典：現代語・古語第２版』『新明解国語辞典第８版』『大辞泉第２版』『大辞林第４版』『明鏡国語辞典第２版』『例解国語辞典第５版』）を取り上げる[2]。

まず、ガの意味記述で注目されるのは、上に挙げた全ての辞書（『例解』を除く13種）で、「ののしり」あるいはそれと似通った「非難」「恨み」といった気持ち・感情（以下便宜上「ののしりの気持ち」

[1] 漫画から用例を掲出する際には、吹出に書かれた台詞を鉤括弧で括り、同一人物の一連の台詞が複数の吹出に分かれている場合は鉤括弧内をスラッシュで区切って示す。

[2] 以上の辞書は、下線を付した漢字２字で略記する。なお、『例解』ではガの用法についての説明はあるがその意味は記述されていないこと、また、参照した辞典のうち『講談社カラー版日本語大辞典第２版』『三省堂現代新国語辞典第６版』にはガ自体の記載がなかったことを注記しておく。

としてまとめる）と結び付けて説明がされていることである[3]。次に、助詞としての位置付けおよび機能に着目して見ていく。ガは、(4)に示すように、格助詞あるいは終助詞のどちらかに位置付けられる。

(4) a. 格助詞『岩波』『広辞』『新明』『例解』
　　b. 終助詞『日国』『旺文』『角川』『学研』『言泉』『小学』『新潮』『大泉』『大林』『明鏡』

(4a)と(4b)の違いは、基本的には、格助詞の文末用法と捉える立場をとるのか、文末形式化した終助詞と捉える立場をとるのかの違いと言える。(4a)では、ガの後に「述語」の省略が想定されるのに対し（例えば『例解』では、「この臆病者が」は「怖気づきやがって」のような「言わずもがなの語」を省略したものとしている）、(4b)では、後に続く「述語」は想定されない。このような立場の違いは、機能の捉え方の差となって現れている。(4a)では、ののしりの気持ちを「表す」「示す」という捉え方がされている。これに対し、(4b)では、ののしりの気持ちを「表す」（７種の辞書）あるいは「強める」（３種の辞書）というように機能上異なる捉え方がされている（後者には下線を付している）。「強める」というような捉え方をしている３種の辞書では、名詞にののしる意の接尾辞「め」の付いたものを受けるというような、接尾辞「め」と関連させた説明が見られる（４節で再び取り上げる）。これら辞書が説明するところを、格助詞（主格用法）からの派生として見ると、次の(5)のようにまとめられるように思う。

(5) 格助詞（主格用法）「この大ばか者めが、何をしているんだ」
　　↓「述語」の省略
　　a. 格助詞（文末用法）「この大ばか者めが(何をしているんだ)」：ののしりの気持ちを｛表す｝
　　↓機能の変化
　　b. 終助詞（文末形式化）「この大ばか者めが！」：ののしりの気持ちを｛表す｝｛強める｝

ここで、ガの記述について、(5)をもとに検討したい。(5a)のような見方は、次の点で問題を含む。

(6) a. （釣り勝負でペアの鷹村が釣りあげた魚を逃してしまう）鴨川会長「何やっとるんじゃこのバカ者が‼」鷹村「うるせ――っタコ坊主！飛び込んで魚持って来い」（『はじめの一歩』510「風雲！釣り船幕之内！！」）
　　b. 部下「隊長‼こいつは我々の手に負えませんよ‼」隊長「くそォ」幽助「さがれ　こわっぱが‼」（『幽★遊★白書』148「覚醒の瞬間(とき)！！」）
　　c. (敵からの反撃を受ける)伊之助「いっ…てェェェ‼／この糞虫が‼」悲鳴嶼「お前たち生きていたか…‼」伊之助「死んでたまるかボケェ‼」（『鬼滅の刃』190「ぞくぞくと」）
　　d. （ボクシングの試合中、感謝の気持ちを伝えられて）鴨川会長「バ　バカ者が‥‥」（心内語「こらえる作業で試合に集中できんじゃないか！／大観衆の前でなければ大泣きしとるわい／覚悟を決めろ‼」）（『はじめの一歩』392「最高のセコンド」）

前後の一連の台詞との関係に注目すると、(6a)は主述関係を持つ文（「このバカ者が何やっとるんじゃ」）として再構成が可能である点で、ガを格助詞として分析することも可能である。一方、(6b, c)の直前の台詞は命令文、話し手の感覚を表出する文であり、下線部と構造上の主述関係を持つわけではない。よって、ガは格助詞として機能しているとは言えない。また、(6d)は、直後の一連の心内語と主述関係を持たない点で、話し手が「述語」を省略して発話したとは考えられない。このことから、(5a)のような見方で(6a)を捉えることは、ガの実態に即していないように思われる。以上を踏まえて、本発表では(5b)の見方に立った上で、ガの助詞としての位置付けを再検討する意味も含め、ガの意味・機能を論じる。

３．話し手の感情・評価を表す文とガ

この節では、名詞句構造を備えた話し手の感情・評価を表す文に着目し、ガと結び付く意味およびガの機能を検討する。その際、3.1節で「悪態文」（笹井 2019）、3.2節で「ほめあげ文」（笹井 2018）およびそれに類似する文を取り上げる。

3.1　「悪態文」とガ

笹井(2019)は、悪態をつくときに名詞句の構造で用いられる発話を包括的に分析し、「悪態文」という位置付けを与えている。「悪態文」とは「卑罵的な意味をもつ語が文を構成しており、それを発話することによって、対象への怒りや呆れ、嘲り、蔑み、嫌悪、侮蔑などの話し手の情意を表出しつつ、悪態をつ

[3] 『日国』において「名詞または名詞にののしる意の接尾語「め」の付いたものを受けて、感動を表わす。ののしりの気持が強められる」というように「感動」の一種として「ののしりの気持ち」を説明していると考えられること、『広辞』において「驚きや非難の意を込めて示す」というように「驚き」にも言及していることを注記しておく。

く文」のことである。ここでは、悪態をつくという行為的な意味と話し手のネガティブな情意を表出するという機能を結び付けて、「悪態文」の発話を捉えていることに注目する。

「悪態文」は構成される名詞の意味特徴によって、(7a, b)のような体系（「貶め文」「レッテル貼り文」）として整理されている。

(7) a. 貶め文：①「太郎め！」「こいつめ！」「太郎のやつ！」「こいつ！」
②「無礼者め！」「愚か者め！」「臆病者め！」
b. レッテル貼り文：「ばか者！」「恥知らず！」「へそ曲がり！」「嘘つき野郎！」

(7a)の「貶め文」は待遇上の意識で「対象を卑しめ、貶める」とされるものであり、(7b)の「レッテル貼り文」は「具体的な「ネガティブな価値評価」を下す」とされるものである。(7a)の「貶め文」は、「単に対象を卑しめ、貶める」もの(7a①)と、「具体的に価値評価を下すことと、卑しめ、貶めることの両方の行為を行っている」もの(7a②)にさらに区分される。よって、「悪態文」は２種３類に分類される。以下では、この「悪態文」に着目し、ガの表す意味・機能を考察する。まず、(7)にガを後接させたものを次の(8)で示す。

(8) a. ①「太郎めが！」「こいつめが！」「太郎のやつが！」「こいつが！」
②「無礼者めが！」「愚か者めが！」「臆病者めが！」
b. 「ばか者が！」「恥知らずが！」「へそ曲がりが！」「嘘つき野郎が！」

(7)と(8)ではニュアンスの違いは出るものの、その発話によって話し手のネガティブな情意を表出しつつ悪態をつくという意味では同じである。このことは、(1)(6)の発話およびそこにガが出現しない発話を想定した場合にも言えることである。よって、(1)(6)のようなガが出現する発話を、「悪態文」にガが出現したものと分析し、ニュアンスの差の部分にガの機能が関与していると考える[4]。

これらのことから、ガと一般に結び付けられてきたののしりの気持ちは、ガ自体によるものとは言えず、ガを伴う「悪態文」を発話するという行為から生じる意味を捉えたものであると考えられる。そしてこの傍証として、２節で取り上げた辞書(4b)において、いずれの例文も「悪態文」の体系の中に収まることが指摘できる。次の(9)は、(4b)の辞書の例文を(8)に対応させる形で示したものである[5]。

(9) a. ①「あいつめが」（『大泉』『角川』）
②「このあほうめが」（『大泉』）「ばか者めが」（『新明』）「「この大ばか者（大馬鹿もの）めが！」（『明鏡』『大林』）「あのなまけものめが」（『旺文』）「この不孝者めが！」（『学研』）「このおろか者めが／このばかが」（『小学』）「この能無しめが」（『言泉』）
b. 「（この）おろかものが」（『岩波』）

以上のことから、「悪態文」に出現するガの機能は、(10)のように捉えられる。

(10)「悪態文」の発話によって表出される、話し手のネガティブな感情・評価を強める

3.2 「ほめあげ文」とそれに類似する文とガ

笹井(2018)は、「よっ／いよっ！幸せ者！」のような、呼掛詞[6]「よっ（ヨッ）／いよっ（イヨッ）」を常に伴って運用され、「ほめあげる機能」を持つ文を「ほめあげ文」と位置付けている。「ほめあげ文」は、「【よっ(ヨッ)／いよっ（イヨッ）＋名詞（「！」、促音化または長音化）】」という定式化のもとで運用されていると考えられている。前節の「悪態文」を構成する名詞が卑罵的な意味を持つのとは対照的に、「ほめあげ文」を構成する名詞（「ほめあげ名詞」）は「ポジティブで良い価値評価」を表すとされる。「ほめあげ文」は、ほめあげる対象が聞き手として言語場に存在することを前提に、聞き手に聞かせることを目的として発話される文とされ、したがって「呼び掛け文」の一種と見做されている。そして、笹井(2018:14)では「ほめあげ文にはほめあげる対象を明示する形式として「この」「あの」を含む「*よっ！この幸せ者！」のようなものは観察されない」とする。このことは、聞き手の存在が前提と

[4] ２節では、省略された「述語」が存在しないことからガが格助詞として機能しているとは考えられないこと、したがって終助詞という見方をすることを述べた。このことは、「悪態文」が「完備句」（山田 1936）とされ、省略された語句や文脈によって補われる文ではないとされていること（笹井 2019）と整合的である。

[5] (9a②)(9b)においては、ほぼ全ての例がア・コ形の指示詞を含んでいる点が注目される。指示詞「この」「あの」は悪態をつく対象を明示する形式である（４節で取り上げる）。その場合に、ソ形ではなくア・コ形の指示詞であるのは、一種の表出文としての「悪態文」（笹井 2019）の特徴が反映した結果であると考えられる。

[6] 「呼掛詞」は森重(1959)の用語である。

なる、「お母さん。」「佐藤さん。」のような「単純な呼び掛け文」にア・コ系の指示詞が観察されないという事実から見て自然なことであるとされている。以下では、まず「ほめあげ文」に類似する文の存在を示し、「ほめあげ文」とそれに類似する文が指示詞を含む例について確認する。その上で、話し手のポジティブな感情・評価を表す文にガが出現するという事実を指摘するとともにガの機能を考察する。

「ほめあげ文」に観察されるのは「よっ（ヨッ）／いよっ（イヨッ）」という形式のみであり、他の呼掛詞が観察されることはないが（笹井 2018）、その代わりに擬音語「ヒューヒュー」を伴って発話される、(11)のような文がある（ここでは便宜的に「ヒューヒュー文」と呼ぶ）。

(11) a. （レオという名前のフクロウについて）どうです？凛々しいでしょう？　レオはかわいいというよりかっこいいですね、ヒューヒュー！イケメン！←親ばか
(https://ameblo.jp/owlreo30/entry-12175098320.html)
b. そして、天然系のスマイリー次女がボソリと、　わたしも、実はきのう即興でラップを創作して、クラスメートに披露したら　ひゅーひゅー！天才！！　って言われちゃったんだよ。
(https://ameblo.jp/ateliermilne/entry-12173382653.html)
c. 前の席のアベックの彼氏の方が彼女の肩に頭を乗せて…　ひゅーひゅー甘え上手／(^0^)＼
(http://thoroughfare.jugem.jp/?eid=21)

「ヒューヒュー文」は、擬音語「ヒューヒュー」を常に伴って運用され、それを構成する名詞および文の機能が「ほめあげ文」と同等と言える文である。(11a)の「イケメン」、(11b)の「天才」、(11c)の「甘え上手」は、「ポジティブで良い価値評価」を表している。また、(11a)では「レオ」、(11b)では「次女」、(11c)では「彼氏」をほめあげる対象として発話がされている。よって、「ヒューヒュー文」は、機能上「ほめあげ文」と同列のものとして位置付けられる。ここで注意したいのは、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」において、指示詞（「この」）を含む例が確認できることである[7]。

(12) a. いやいや、この新郎（社員）の幸せいっぱいの表情が見れただけでも大満足！　そんな緩んだ顔、会社で見たことないぞ！！よっこの幸せ者！！(http://www.nagatsu-g.co.jp/blog/nishi20181008/)
b. 水曜日のカンパネラの曲「シャクシャイン」にあわせてインコがノリノリで踊る動画が投稿され、見る人までノリノリにさせてしまっています。ヨッ！この盛り上げ上手！
(https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1609/09/news127.html)
c. （結婚したばかりの宮下について）みなさん、店で宮下を見つけたら「ヒューヒュー、この幸せもん。」って、言ってあげてくださいね。(http://g831.jugem.jp/?month=201206)
d. （伊野尾慧主演の映画について）観てきました！ピーチガール　ヒューヒューこのドラマチック野郎〜〜〜！！！(映画鑑賞後謎のハイテンション)
(http://bisuko0622.hatenadiary.jp/entry/2017/05/21/002240)

ここで、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」にガが出現するという新しい事実を指摘したい。(13)は、話し手のポジティブな感情・評価を表す文にもガが出現することを示している。

(13) a. （学生時代のアルバイトと社会人で貯めた 150 万円に加えて、不足分を父親から出してもらってスポーツカーを買ったことに対して）ヨッ幸せ者が〜　コラぁ〜
(http://mimizun.com/log/2ch/auto/1323060240)
b. （ライブで演奏したミュージシャンについて）内容は残念ながら、当日居た人で共有させて頂きますが　本当、最高のお客さんや仲間に囲まれながら楽しそうにやってたな〜。　よっ、この幸せもんが！！(https://ameblo.jp/3score/entry-12218160406.html)
c. （サッカー選手のファッションについて）ちゃ〜んと全身を鏡でチェックしてる感じがする　サラ〜ッと着こなしときながら　い〜い時計とかしてるんだろな〜　ヨッ！このいろおとこが！
(https://ameblo.jp/begle/entry-11037401357.html)
d. （質問者◎に彼氏について聞かれて）→まァ、たまに…可愛いと言ってくれるコトも…(照)　って、なに言わせるんですかァっΣ(￣□￣;;)！！　◎ヒューヒューこの幸せもんが〜〜
(http://ta-kun1965.seesaa.net/category/20651952-1.html)

[7] (12)は「ほめあげ文」において「ア・コ系の指示詞が観察されない」とした笹井(2018)の反例となり得るものである。本発表では、話し手のポジティブな感情・評価を表す文においてもガが出現することを問題とするので、この指示詞の問題には立ち入らず、指示詞（「この」）を含む(12)を「ほめあげ文」あるいは「ヒューヒュー文」に含めて分析する。ただし、(12)のように、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」を構成する名詞にソ系ではなくコ形の指示詞が観察されるという事実は、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」全体ではなく名詞の側で表出文（聞き手を認定しない文）としての性質を持つことを示していると考えられる。「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」全体が表出文としても解釈されるのか、ほめあげる対象が聞き手として認定されるのかなどの点については、今後さらに検討したい。

e. あっくん両手に花でいいねー♪　ヒューヒュー！この、平成のモテ男がっ！！ｖ（＞ｗ＜＊）
(http://mugineecyann.blog91.fc2.com/blog-entry-674.html)

以上のことから、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」に出現するガの機能は、(14a)のように捉えられる。ここまで、(10)では「悪態文」、(14a)では「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」に着目してガの機能を捉えてきたが、両者を踏まえて、ガの機能を(14b)のように捉える。

(14) a. 「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」の発話によって表出される、話し手のポジティブな感情・評価を強める
b. 評価的意味を持つ名詞句の発話によって表出される、話し手の感情・評価を強める

４．ガの出現環境

この節では、前節までの考察を踏まえて、ガの出現環境を示す。ガを伴う「悪態文」（3.1節）において出現環境を見出し、その環境がガを伴う「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」（3.2節）にも成立することを指摘する。ガを伴う「悪態文」を観察してみると、ガの出現環境として、構造の観点から(15a,b)が指摘できるように思われる。

(15) a. 名詞句が指示詞（「この」「あの」）を含んでいること：(1a,d)(6a,c)
b. 名詞に接尾辞（「め」）が下接していること：(1c,e)

(15a)は、２節で取り上げた辞書(4b)の例文(9)において、指示詞「この」「あの」を含むものがほとんどであったことが傍証となる。(15b)は、(4b)の辞書において接尾辞「め」と関連させて説明がされていたことを、本発表の観察によって出現環境として捉え直したという意味合いを持つ[8]。(15)の環境は、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」にも成立すると考えられる。(15a)については(13b-e)のように、ガが「この」を含んだ名詞句と多く共起するという事実を指摘する。なお、(13)において、「この」が使われるのは、「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」が言語場に存在するほめあげる対象に向けて発話されるからである。(15b)については、(16a,b)を挙げる。名詞に下接する接尾辞としては、「め」の他に(16c)のような「ども」も観察された。接尾辞「め」「ども」は形式上「卑しめ、貶めの待遇的な意味を付加する」ものであるが、(16)はネガティブな感情・評価を表していない。笹井(2018)では、「卑罵表現」の持つ「親愛表出機能」（米川 1999）に着目し、「よっへっぽこぉ」のような「ネガティブな価値評価を敢えて聞き手に聞かせている」用例を「ほめあげ文の形式を借りた親愛表現」として把握している。(16)の用例も「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」の定型に支えられた「親愛表現」であり、接尾辞「め」「ども」はポジティブな感情・評価を表すために敢えて用いられていると考えられる。

(16) a. （東京での落語会で演じた後）打ち上げは魚民で１１時半近くまで。明日は名古屋で毒演会なのだ。イヨッ、この働き者めが！(http://kairakuteiblack.blog19.fc2.com/blog-date-20070609.html)
b. （還暦近いはずの轟悠の公演ポスターに感嘆して）トド様ぁ～(丿￣o￣)丿ｲﾖｯ！！この魔物めがぁ～(ハート)(https://ameblo.jp/5114861/entry-12580297040.html)
c. というわけでデートが決まったのだった。場所を選ぶのはキュウの役目だ。どこで聞いていたのかクラスメートの男子達にからかわれる。　男子生徒「ひゅーひゅー、このカップルどもがー！」
(https://w.atwiki.jp/tanorcampaign/pages/100.html)

以上の考察から、(15)で示した環境は、より一般化して示すことができる。(17a)は、対象を明示する形式として、「宇多の愚か者めが…」(1e)のように対象を示す呼称（「宇多」）が含まれる場合も考慮したものである。なお、(16)はガの出現において(17a,b)をともに満たしている例であり、2つの出現環境は累積的に影響すると考える。

(17) a. 名詞句が対象を明示する修飾語を含んでいること（出現環境Ⅰ）
b. 名詞に卑しめ、貶めの待遇意識を示す接尾辞が下接していること（出現環境Ⅱ）

５．ガの出現環境の成立背景についての考察

前節では、ガに2つの出現環境が考えられることを示した。ではなぜこのような出現環境が成立するのであろうか。「あからさまにやってみせる」という発話観（定延 2016）に立って、「悪態文」「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」を発話するという行為について考えることで説明を試みる。

[8] 接尾辞「め」については、「名詞の後ろに接し、その名詞に卑しめ、貶めの待遇的な意味を付加する」とする笹井(2019:23)の理解に従う。

定延(2016)は「発話の「権利」という見立て」を置き、その「権利」を持つ「責任者」が発話を「あからさまにやってみせる」ことができるという発話観を提案している[9]。この発話観の下では、「悪態文」「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」を発話するという行為は「あからさまにやってみせる」ことだと捉えられる。これは、笹井(2019)において「悪態文」の発話は「発話行為自体の意味が文の意味として前面に出てくる」とされていること、笹井(2018)において「ほめあげ文」の発話は「それを敢えて聞かせることがほめあげるということになる」とされていることを統一して扱うということでもある。

このような捉え方をすると、出現環境Ⅰ・Ⅱは、話し手の感情・評価の表出を発話によって「あからさまにやってみせる」度合い（ここでは「あからさま度」と呼ぶ）を高めるように働くと考えられる。次の(18)で「悪態文」を例に説明する。

(18) 「愚か者！」＜「この／あの愚か者！」「愚か者め！」＜「この／あの愚か者め！」

「愚か者！」はそれだけで「悪態文」として成立する。それにもかかわらず出現環境Ⅰ・Ⅱを満たして発話することには意味がある。「この／あの愚か者！」は、悪態をつく対象を指示詞「この／あの」によって明示するという意味において、また「愚か者め！」は、悪態をつく対象にネガティブな感情・評価を持っていることを接尾辞「め」によって明示するという意味において「あからさま度」は「愚か者！」より高い。この二つが組み合わさった「この／あの愚か者め！」は、形式上(18)の中で最も「あからさま度」が高いということになる。また、(18)のような関係は「ほめあげ文」「ヒューヒュー文」にも対応させて考えることができる。なお、前節で見たように、(19)における接尾辞「め」は、ほめあげる対象にポジティブな感情・評価を持っていることを表すという意味がある。

(19) 「よっ（いよっ）／ヒューヒュー！幸せ者！」＜「よっ（いよっ）／ヒューヒュー！この幸せ者！」「よっ（いよっ）／ヒューヒュー！幸せ者め！」＜「よっ（いよっ）／ヒューヒュー！この幸せ者め！」

以上のことから、出現環境Ⅰ・Ⅱで「あからさま度」が高まる状況と連動して、ガの機能(14b)を利用した発話がされるので、ガが使用されやすくなると考えられる。

なお、(1a)の「ばっか野郎があっ‼」、(1b)の「クソガキが‼」、(6b)の「こわっぱが‼」、(6d)の「ババカ者が‥‥」、(13a)の「ヨッ幸せ者が〜」のように、出現環境Ⅰ・Ⅱとは無関係にガが出現する場合においても、出現環境Ⅰ・Ⅱとは別の観点で「あからさま度」を規定することができる可能性があることを述べておく。出現環境Ⅰ・Ⅱとは無関係にガが出現する「悪態文」を改めて観察してみると、音声の観点からの特徴的な現象が見出せる。(6a)は促音の挿入（「ばっか」）、(6d)ではつっかえ（「バ　バカ」）を伴っている。また、(1a)の「ばっか野郎があっ‼」は手書きで太く大きく書かれている点、(1b)の「クソガキが‼」は吹出の中にいわゆる「怒りマーク」が配置され、少しかすれたフォントで書かれている点が注目され、興奮状態の力んだ口調であることが読み取れる。以上を踏まえると、音声の観点からもガの機能(14b)との連動が考えられるが、構造の観点とともに包括的な説明ができるかどうかは未解決の問題であるため、今後詳細に検討したい。

６．おわりに

本発表では、ガについて次の３点を述べた。今後は、それぞれの通時的な検討が必要である。

(20) a. ののしりの意味は、「悪態文」の発話によって表出された話し手のネガティブな感情・評価に由来する（すなわち、ガ自体がののしりの意味を持つのではない）
b. 評価的意味を持つ名詞句の発話によって表出される、話し手の感情・評価を強める機能を持つ
c. 格助詞ではなく終助詞として位置付けられる

参考文献

笹井香(2018)「ほめあげる機能をもつ文：ほめあげ文について」『日本文藝研究』70(1):1-23，関西学院大学.
笹井香(2019)「卑しめ、貶める機能をもつ文：悪態文の一種としての貶め文」『関西学院大学日本語教育センター紀要』8:19-33.
定延利之(2016)『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房.
定延利之(2020)「「発話の権利」とはどういう現象か」定延利之（編）『発話の権利』197-224，ひつじ書房.
森重敏(1959)『日本文法通論』風間書房.
山田孝雄(1936)『日本文法學概論』寶文館.
米川明彦(1999)「卑罵表現も変わりゆく」『月刊言語』28(11):30-33，大修館書店.

[9] 「発話の権利」については、定延(2020)において「会話場から離脱する発話の権利」として詳しく論じられている。なお、「あからさまに」や「〜してみせる」は、意図性は必ずしもないという定延(2016)の専門用語である。